

大正期の北海道文学

神谷 忠孝

はじめに

ここでいう「北海道文学」は北海道に取材した文学という意味で用いる。大正期に限定したのは、この時期の北海道が樺太とともに内国植民地として殖産興業の実験場となったからである。炭鉱開発とそれに伴う鉄道網が急速に拡大し資本家と労働者の対立が社会問題となった。それ以前の地主制度と小作人の問題も明らかになった。また、北海道生まれの文学者が少年から青年に成長した時期でもあり、社会派文学に目覚める契機となった。

従来の北海道文学史における大正期の扱いは有島武郎が中心で、素木しづ、森田たまなどにふれる程度であった。ここでは重複をなるべく避け、埋もれていた文学作品の検証に力点をおく。

I 大正時代の特徴

一般的に明治時代は、富国強兵政策によって日清、日露戦争に勝利し、台湾、朝鮮を植民地化することで一等国となり軍部や一部政治家を中心とした帝国主義が強まった時代と言われている。

これに対し大正時代は15年という短い期間のせいもあって歴史の中では影が薄いという印象がある。しかし、政治史の面では明治天皇の死から半年後の1913（大正2）年に画期的な変化が起こった。「憲政擁護」第3回大会が開催された直後、民衆と世論が新しい政治を要求して政府系新聞社、交番を襲撃する動きが大阪、神戸、京都、広島にまで拡大し桂内閣を辞職に追い込んでいる。第1次山本権兵衛内閣が成立し、尾崎行雄らの政友倶楽部が結成され、翌年には原敬が政友会総裁に就任した。市民を中心としたブルジョアジーによる政治運動が勝利したことは大正時代に活気を与えた。この時期に政治思想の主導権をとったのは吉野作造の民本主義、大正デモクラシーであり、もっと革新的な動きを示したのは大杉栄、堺利彦らで、彼らは幸徳秋水の思想を継承していた。

大正2年で注目されるのは石川啄木の「時代閉塞の現状」が『啄木遺稿』で明らかにされたことである。自然主義文学の行き詰まり、永井荷風に代表される江戸趣味への逃避、幸徳事件に見られる盲目的反抗などを批判し、「必要」の文学を提唱した啄木の思想は大正時代の文学の方向を示唆した。「必要」を「芸術と実行」の問題とらえたのが白樺派の一部で、「必要」を「必然」ととらえたのがマルクス主義文学で、のちにプロレタリア文学運動として展開した。

第一次世界大戦後、世界中に社会主義の思想がみなぎり、職工、労働者の発言権が強くなった。日本国内では戦後成金が多く出てきたと同時に貧富の格差に抗議する下層社会の声が文学の面にもあらわれた。宮島資夫の「抗夫」（1916）が先駆となり、民衆詩運動がこれに続いた。

理想主義を掲げて登場した「白樺」の武者小路実篤が「新しき村」を構想して実践に移したこと、有島武郎の農場解放が大正の初めから計画されていたこと、宮沢賢治のイーハトーヴなどは、芸術を実行にまで高めようとする行動的浪漫主義であった。目指したのはユートピアである。この3人に共

通しているのは労働者に対する劣等感であった。

スイスで起こったダダイズムが日本に移入されたのは1920年（大正9）である。辻潤、高橋新吉、武林無想庵によって展開された運動とは別に、ドイツ帰りの村山知義の「マヴォ」を中心に展開した運動は外山卯三郎を介して札幌に紹介された。同時期、ドイツ留学から帰国した早川三代治が北海道帝国大学農学部農業経済学科の専任講師となり、「北大文芸」に多くの戯曲、詩などを発表した。小熊秀雄が旭川新聞の記者をしながらダダイズム風の詩を書いたのもこのころである。

有島武郎は「革命心理の前に横はる二岐路」（「読売新聞」大正12・2・19）で、「強いてその何れに属すかと問われるれば、アナキストであると答へるに躊躇しないものがある。さうして云ふ迄もなく私の立場は、現在ロシアに於ける二派のアナキズムの中の何れに属するかと云へば、完く妥協のない即ち現在のボルシェヴィズムの如き独裁を絶対に避けるものである。然しそれかといつて、アナキストの群れによつて絶対独裁のない理想国が建設されようとは信じられない者である。何故ならばその建設されたアナキズムの中からも、やはり恐るべき矛盾した独裁の力が、その集団生活の上に及ぼさないかといふことを懸念するからである。従つて私としては自己のテンペラメントの上に進退するより外に途はないのである。」（談話筆記）と述べている。前年に「宣言一つ」（「改造」大正11・1）を発表して「宣言一つ論争」が展開されて孤立無援の状態にあった有島の晩年の思想を知る上で重要な談話であり、この時期の思想界の混迷が表出している。

Ⅱ 北海道の動向

北海道生まれの文学者が文学に関心をもちはじめた時期は、北海道が政府の主導による産業拡大の時期と重なっている。そのことを具体的に物語る史実を年代順に列記すると、以下のような出来事があった。

- 1912・10・05 野付牛 - 網走間営業開始 これにより網走線（池田 - 網走）全通
- 12・23 夕張炭鉱第2斜坑でガス爆発 死者16人
- 1914・11・28 新夕張炭鉱でガス爆発 死者422人
- 12・01 函館大火 673戸焼失
- 12・09 苫前村にヒグマ 3日間に7人殺害さる（吉村昭「巖嵐」）
- 1915・11 帝国製麻美瑛農場暴行事件
- 1916・10・06 拓殖計画改定案ご閣議決定
- 1917・02・19 上歌志内炭鉱でガス爆発 死者12人
- 03 日本製鋼所職工賃上げストライキ
- 1918・03・23 酒造法改正 馬鈴薯澱粉粕による焼酎製造可能となる
- 03・27 北海道線第1,2列車に食堂車連結、車内販売人も乗車
- 04・01 北海道帝国大学を札幌に設置 予科、土木専門部、水産専門部設置
- 04・19 政府、滝川種羊場を開設
- 06・23 秩父事件の井上伝蔵、北見で没 死の臨んで家族に経歴を明かす
- 06・23 夕張炭鉱でガス爆発 死者12人
- 08・01 開道50年記念博覧会 札幌、小樽で開催

- 08・12 札幌電気軌道の路面電車が札幌で初めて走る
- 1919・09・09 小樽ではしげ業組合が賃上げを要求して千人がストライキ
- 10・01 室蘭日鋼の職工 1700 人賃金スト
- 12・07 湧別炭礦鉄道が設立
- 1920・02・23 空知炭鉱神威鉱でガス爆発 死者 27 人
- 06・14 夕張炭鉱北上坑でガス爆発 死者 209 人
- 10・01 第 1 回国勢調査 本道人口 235 万 9183 人
- 1921・03・03 北海道の史蹟名勝天然記念物指定（手宮洞窟、マリモ、野幌原始林）
- 08・05 西和田―根室間営業開始 函館と根室を結ぶ横断線路完成
- 10・04 道庁 静内村にアイヌ系住民用の静内病院完成
- 1922・07・18 有島武郎が農場解放宣言
- 08・24 道内全域で大水害 死者 117 人 家屋流失 872 戸
- 11・01 鬼志別―稚内間開通 宗谷本線全通し北海道を鉄道が縦断
- 1923・02・21 樽前山噴火
- 06・09 有島武郎 波多野秋子と軽井沢の別荘で心中
- 10・02 北炭真谷地礦で賃金引下げ反対のストライキ起こる
- 11・05 国鉄渚滑 - 滝ノ上間開通
- 1924・01・05 上歌志内炭鉱でガス爆発 死者 76 人
- 07・27 大泊―小樽間連絡船「大礼丸」が樺太ノトロ岬沖で沈没 死者 196 人
- 1925・08 小樽総労働組合結成
- 1926・02・13 日本労働組合評議会北海道地方評議会が発足（委員長 境一雄）
- 05・01 道内で組織的第 1 回メーデー 小樽、函館でデモ行進
- 05・14 北大創基 50 周年記念式典 クラーク像の胸像除幕
- 05・24 十勝岳大爆発 死者・行方不明 144 人 罹災戸数 482 戸
- 08・21 北海道鉄道 沼ノ端 - 苗穂間営業開始
- 10・14 夕張鉄道線 栗山 - 新夕張間開通

これらの史実から、鉄道敷設の実現、炭鉱事故の多発が顕著であったことがわかる。大量の労働者を必要とするこれらの事業の背景には多くの人災が伴っていたわけである。いわゆる「タコ部屋」が各地に設けられた。

Ⅲ 沼田流人「血の呻き」

沼田流人（1898・6・20～1964・11・19）は岩手県岩手郡渋民村（現・盛岡市）に母沼田カツと父石川（啄木の遠縁という。名前不詳）の間に生まれた。本名ははじめ一郎、のち明三。父が樺太の出稼ぎに行ったまま行方不明となり、母は一郎を連れて山本という人と再婚したが数年後離婚。母は一郎とともに倶知安で木賃宿を営む祖父沼田仁兵衛（カツの父）の元に身を寄せ、一郎を仁兵衛に預け十勝の池田町で再々婚した。1905年9月、両親が不在となったため仁兵衛の養子となった。1911年、倶知安第三尋常高等小学校高等科に入学。1912年秋、放課後学友と遊びに行った製材工場で友達の

過ちから流人の羽織の袂がベルトにはさまって左手が巻きつき、運ばれた病院で左腕から切断された。

1913年、高等科を卒業して祖父の木賃宿を手伝う。1917年、東俱知安線（京極線）敷設工事がはじまり、木賃宿からタコ部屋労働者が働く姿が見えた。流人がタコ部屋に潜入したのは1918年、20歳の時と言われている。京極線は1919年に開通した。宿泊客が少なくなり流人は造材飯場で働きながら文学への志を持ち、早稲田大学の講師で作家の吉田絃二郎に手紙を出し苦境を訴えた。絃二郎は流人に関心を寄せ「供養の心」という題で流人と祖父のことを書き、創作集『小鳥の来る日』（1921）に収録した。1920年頃、流人と祖父は木賃宿を廃業して近くの曹洞宗・幸運寺に住み込んだ。住職は77歳の今出幸運。その下で流人は、黒地の紙に金粉で書く写経を習い、新聞の死亡広告欄にある見知らぬ人に送りつけて礼金を得ることができた。返品はほとんどなかったという。1921年、流人は得度して名を一郎から僧名・明三に改称した。

1921年2月、初期プロレタリア文学の機関誌「種蒔く人」（種蒔き社）が有島武郎が資金を出して創刊されたが発売禁止になった。10カ月後に再刊され、流人の「三人の乞食」が載った。このことを流人が知ったのは戦後になってからであった。

1922年10月、有島は個人雑誌『泉』を東京の叢文閣から創刊した。24歳の流人は書簡を通じて交流のあった有島に「血の呻き」を単行本として出版することを頼み、有島が労を取った。『血の呻き』完全版（1923年6月5日発行、発行所・叢文閣）は発行と同時に発行禁止処分を受け世に出ることはなかったのだが、1冊だけ著者がひそかに保存していた。

完全版は流人の次女・瑠璃子さんが札幌郷土を掘る会に届けて公開されることとなった。「小説『血の呻き』とタコ部屋」（2010・11・1 発行・札幌郷土を掘る会）が刊行され、完全版の3分の1が復刻されている。

1926年9月、『血の呻き』中編（タコ部屋部分）が雑誌「改造」に「地獄」という題名で掲載された。伏字が多く内容が読み取れない部分が多いのだが、「北海道文学全集・第六巻」（立風書房、1980）に収録されている。1928年5月、「地獄」に加筆した『監獄部屋—地獄に呻く人々』が金星堂から出版されたが発禁処分となった。翌年改定版の発売が許可されたが、妻子を養うために作家への道を断念した。その後の足跡は不明だが、戦後の1948年から道立俱知安高等学校の図書館に勤務し書道の講師を勤めた。俱知安高校で同僚だった武井静夫氏が『沼田流人伝—埋れたプロレタリア作家』（俱知安郷土研究会、1992）を刊行している。

部分復刻された「血の呻き」の主人公の名は藤田明三である。作者が得度したときの名前と同じである。明三は左手が義手で作者の実像に近い。土工人夫募集の辻ビラを見て周旋屋を訪れタコ部屋を志願する。前金もいらないというところは現実離れしているように思う。過酷な労働、逃亡者へのリンチ、半死半生の人夫を投げ込む部屋などの描写が続く。主人公の明三は目撃者として設定されている。「血の呻き」が発禁処分を受けた理由を文章から推理してみる。「北海道文学全集」収録の「地獄」で伏字になっている部分を「血の呻き」で復元する。

奇妙な巡視が行ってしまうと監視者等は、そこで泣いている床屋をひどく殴りつけた。

全く恐ろしく、死ぬ程も打たれた。

彼は、その折れた鋏の柄の杖が、イタヤ楓の木片が、背中に当たる毎に、躍り上るようにして、悲鳴をあげた。彼は、生きてままで、その皮を剥がれた。

事実、杖や鞭は、生物の肉に噛みついた。やせこけた背中肉は、見る間に柘榴のように割れ爛れて腫れ上り、蒼黒いような血が滲んで来た。

監視者等は、そうしてソップをとる骨かなぞのように此生物を叩き潰している間に、もう自分を制する力を失ってしまう。そして、考える事も出来ない程惨酷な方法を思い付いては、それをやるのだ。しかも、彼等は胸をわくわくさせながら、たえられないように笑い痴れながら、それを行うのだ。

蠍は、何かその床屋の火に焙ぶられているような恐ろしい苦悶の態を見て、快楽に酔い痴れてでもいるような、気味悪い笑に顔を歪めた。

床屋は、地獄の火の中にでもあるように跪いて這いまわった。然し、彼は、もうすっかり声も嘎れて立てられなくなって、痙攣的に頭や四肢を動かしていたが、遂に、地面に額を打ちあてて動かなくなってしまった。

この檻褸になる程殴られた床屋は、次の日一日部屋へ投げられていたきりで、三日目からまた働き始めた。(北海道文学全集第6巻「地獄」469頁下段の伏字部分)

「地獄」の伏字部分の多くは、このような惨酷な場面である。中には死ぬ場面もあるが、総じて公序良俗に反する場面を取り締まったといえることができる。文中の「蠍」は監視者のあだ名である。ほかにも「ブルドッグ」という監視者もでてくる。タコ部屋の実態を記録として書き残そうとした沼田流人の作家魂を評価するためには伏字の復元が必要である。

Ⅳ 小林多喜二「人を殺す犬」

「龍介と乞食」(『小説倶楽部』1922・3)は少年のころ街に乞食が多い理由を母にたずねると、「監獄部屋」から追い出されたり逃げてきた人だと聞かされる。間もなく龍介の家の裏山を崩す工事のための「監獄部屋」が建ち、毎朝十人一組に棒頭が一人付き、工事現場に行く姿を見る。青年になった龍介が友人と街を歩いていると盲人の乞食から宿屋まで連れていってくれと頼まれる。道すがら事情を聞くと、樺太の監獄部屋で働いていたが目を悪くして追い出されたという身の上話をする。同情した龍介は財布から一円をだして与える。宿まで送り届けると、宿屋の女将が乞食に「またお前さん人様のお世話になったんですね」というのを聞いてだまされたことに気付き憤慨するという筋である。多喜二が小樽築港駅前の若竹町に住み小樽築港の工事が行われたことに取材している作品。

「人を殺す犬」(『小樽高商校友会誌』1927・3)は十勝岳を望む鉄道工事のタコ部屋の様子が書かれている。23歳の源吉が病気になり、死ぬ前に青森に残してきた母親に会うため板一枚を持って十勝川に飛び込んで逃亡を企てる。失敗して縄で縛られ、見せしめに土工夫たちの目の前で土佐犬に噛み殺されるという筋である。

「日記」(1926・8・24)に「人を殺す犬。七枚。一気に書いたもの。監獄部屋の出来事である。コント。適確に、リアリスティックに、簡潔に。思想を出さず。事実の上から。自信あり。葉山嘉樹氏の『セメント樽から出た手紙』と同じ位の作と思う。」とある。1927年3月2日の日記には、「高商の校友会誌に出した『人を殺す犬』は、あまり残酷なので出せない、と占部教授が云ったそうだ。これを出す出さないなんて、些々たることだ。出したからって、出さないからって、『現実にある』事実をどうする積りだ。」と記されている。

『人を殺す犬』改作』（新日本出版社・定本小林多喜二全集第13巻）は源吉が犠牲になるまでの前の部分を加筆している。「監獄部屋」〈ノート稿〉（全集第3巻）は初出「人を殺す犬」の約2倍の字数である。日付は〈1928・5・27〉となっていて、初出から2年弱。多喜二がこの題材に執着したのは、北海道の建設現場を小説にすることで日本の現実を表出したかったからであろう。

V アイヌ人の日本語表象

1 山邊安之助「あいぬ物語」

樺太の弥満別（ヤマベチ）村で生まれたので山邊を名乗る安之助は四、五歳のころに両親を亡くし親戚の木下知古美郎に育てられた。1875（明治8）年5月7日、ロシアの首都ペテルブルグで日本・ロシアが樺太千島交換条約に調印、9月5日、樺太アイヌ移住の第1船が宗谷に到着した。翌年6月までに108戸、854人が対雁に移住した。安之助が9歳だったとあるから、誕生年は1868年と推定される。1878（明治11）年、対雁移民教育所が開業した。教師は医師、元武士などであった。1883（明治16）年、対雁学校は公立学校となった。生徒数は20人ほどであった。西郷従道が村を訪れアイヌ人と親しく交わる様子をみた永山武四郎がいさめたところ、西郷は差別してはいけないと論じた。また、松本十郎という判官が変装してアイヌを差別する巡査を戒めるエピソードを挿入している。

1884（明治17）年、18歳になった安之助は9里離れた石狩の鯉魚場で働き多額の報酬を得た。アイヌ人たちは漁業を希望し、約500人が石狩川の増毛寄りにある雷札というところに移住し対雁の農地を日本人に貸して地代を得るようになった。1886年から翌年にかけて、対雁の3百人あまりのアイヌ人がコレラ、天然痘のために命を落とした。

1893（明治26）年、安之助は樺太へ帰る計画をたて13人の仲間と船出したが宗谷海峡で嵐に遭いノトロ岬に漂着、番屋でしばらく過ごし故郷の富内村をめざした。村には函館の佐々木平次郎という人が魚場を持っていたのでそこで働いた。2,3年後、石狩に残っていた30人ばかりが村に戻ってきて一緒に働いた。始めは魚を獲って売っただけだったが、石狩の魚場で鯉糟にしたほうが収入増になることを思い出し魚糟を製造するようになった。

1905（明治38）年、日露戦争が始まるとロシア軍の監視が厳しくなり、アイヌ人を1カ所に集めて1里以上村を出ることが禁じられた。7月7日、日本の軍隊が大泊に上陸し戦闘が各地で続いた。富内村のアイヌ人は日本軍に協力した。日本軍が富内を去るとき、旅団長は住民に銃器を渡しロシア軍が攻めてきたら自衛するように言われ守備隊を作った。

戦争が終わると北海道から日本人が島へやってきた。日本人に魚場を奪われないように嘆願書を提出したが受け付けられなかった。安之助は武内旅団長に会うため大泊から豊原に向かう途中日本兵からしらべられた。旅団長の名刺を見せて信用され、豊原で役人たちと会い魚場で漁をする許可を得た。安之助は土人学校建設をはたらきかけ自宅を学校にした。まもなく総代役に選ばれ警察との交渉に尽力した。1909（明治42）年、樺太庁が「土人総代人」15人をおき、学校建設が軌道にのりはじめた。魚場主任の佐々木平次郎とその弟が3百円を寄付し、他の日本人も600円を寄付して12月に学校建設が竣工した。

1910（明治43）年11月9日、白瀬隊長率いる南極探検隊が芝浦港を出航し、安之助は樺太犬30頭とともに乗船した。1年7カ月に及ぶ探検であった。犬は6頭を連れ帰ったが、残る犬が遠吠えで船を見送っていた姿を見て心の中で泣いたという。

『あいぬ物語』（博文館、大正2・11、アイヌ資料集第六巻「樺太編」として昭和55年7月25日、北海道出版企画センター刊）を編集した金田一京助は「序」で、明治40年の夏、湖畔の村で安之助を知り、学校建設に尽力した安之助の人格に共感したと述べている。そして、「此の上は自ら刻苦して展いた此半生の物語を、どうか紙に止めておひさき長い同族の子弟にも読ませ、以て我が意のある所を体得させたいといふ希望を私に図つた。私は喜んで此を諾すると共に、古往今来唯々一つの此のアイヌ自身の著述を、後々までもアイヌ自身の著であることを刻印したいがために、今一つには東西絶無の樺太アイヌ語の記録を作製し、アイヌ語学の資料に供したいが為に、特にアイヌ語を以て述べさせた。」と書いている。金田一京助は「凡例」で『あいぬ物語』の成り立ちについて書いている。特に日本語にアイヌ語でふりがなをつけた理由を述べたところが大事である。

- 一 此の物語は大正元年の夏、著者山邊安之助君が南極探検の業を卒へて、郷里樺太へ帰る間、東京滞在の暇々に成つたものである。
- 一 著者山邊君は日本語が上手で、日本語で語りする際には、語彙も豊富であるし、句法も自由で可なりよく事件を描写する。けれども、アイヌ語で話すとなると、勢ひ語彙も貧弱であり、句法も単調であるから、話し振りが、矢張り普通のアイヌの話しになる。
- 一 此の点では、即ち、語り興味の中心にする場合には、却て、山邊君の日本語を其のまま記した方が善かつたかも知れない。
- 一 けれども、其では、アイヌの著作とは信ぜられまいといふ憾がある。少くとも日本人の筆を入れたものと取られ、もつと甘い、日本固有の文章家の文章などと比較されるやうではつまらない。
- 一 それで、著者山邊君には、比較的不得意なアイヌ語をわざと選んで、これで話して貰つた。これならば、一言一句、純粹なアイヌの口から成つた文章であるといふことに、唯一人疑を挿む人があるまいから。（以下略）

『あいぬ物語』はアイヌ学の分野ではよく知られているが、文学として扱ったのは樺太育ちの宮内寒弥である。『からたちの花』（大観堂、1942・9）所収の「『あいぬ物語』紹介」である。『あいぬ物語』の「遠雷」という部分を引用し、明治三十七年夏、日本の軍艦に追われた露艦ノーウイック号がアニワ湾沖で沈没したのを見た安之助の証言を紹介している。

2 武隈徳三郎「アイヌ物語」

武隈徳三郎は1896年（明治29）8月3日、帯広近郊の伏古に生れた。第二伏古尋常小学校卒。帯広准教員講習所で准教員、尋常小学校本科正教員養成常設講習会で本科正教員の資格を取得。大正3年、音更尋常小学校訓導となるが数カ月で退職。大正5年、胆振国勇払郡鶴川村井目戸尋常小学校校長兼訓導として奉職。河野常吉の知遇を得て1918年（大正7）7月、ジョン・パチュラーと河野常吉の序文を付した『アイヌ物語』（札幌・富貴堂書店）を刊行。1919（大正8）年、井目戸小学校が突然廃校となった。その後鉄道に勤務したが凍傷にかかり挫折。1921年から翌年にかけて樺太の樺保教育所で教職についた。

須田茂氏は「武隈徳三郎とその周辺一・二（「コブタン」33,34号、2010・5～2011・5）で多くの資料を参照して武隈徳三郎の足跡を探索している。「略年譜」で樺太から北海道に戻って以後を補う

と次のようである。〈大正12年3月、帰道後、吉田巖を訪問。5月、平取村池売尋常小学校にて教員。大正13年3月、岩手県遠野の佐々木喜善を訪問、金田一京助、石田収蔵への書簡を依頼。5月の石田収蔵日記に「土人來たり一泊」。昭和5年11月、子供二人を連れて帯広に帰還。昭和11年7月、長女節子、吉田巖を訪ね徳三郎の近況を報告。吉田巖日記に「徳三郎は酒精中毒にて不健康、本年1月より日高浦河方面に放浪の由」。昭和14年11月、吉田巖日記に「今春武隈徳三郎が芽室方面で吹雪中を列車の後方より轢殺され」との記述。〉

『アイヌ物語』は66頁。目次は次の通りである。

- 第一章 アイヌ種族 一 アイヌの名称 二 アイヌの住居地 三 アイヌ族とコロポックンクル 四 アイヌ種族の現今 五 アイヌと和人との関係
- 第二章 アイヌの風俗習慣 一 文身び就きて 二 家屋建設につきて 三 熊祭 四 奇妙なる習俗数種 五 事変又は変死等の場合におけるカムイウエキミムセ 六 アイヌの裁判法
- 第三章 アイヌの宗教 一 宗教及び其の由来 二 現今のアイヌと他の宗教
- 第四章 アイヌの教育 一 アイヌ種族には文字無し 二 家庭に於ける教育 三 学校教育の沿革及び規程 四 学校教育の現況 五 今後の教育に就きて
- 第五章 アイヌの工芸 一 アイヌの造る品物 二 彫刻及び刺繍

この中で数年間の経験から提言しているのは第四章の「今後の教育に就きて」である。就学年齢を6歳から7歳に、修業年限を6年から4年に改めたことに強く抗議している。以下原文を引用する。(原文は旧カナ旧漢字、総ルビ)

児童教育としては、

- 一 特別教育規定に依り、入学学齡満六歳を満七歳に、修業年限六カ年を四学年に改められしは先きに述べし如く旧土人生活を斟酌せしものならんも、児童教育を完全ならしむる上に於て遺憾に堪えず。人の幼児に於ける感化は実に強大なることを俟たず。されば幼児長き間、徒らに家庭に放置するは害ありて益なし。満六歳より学校に入りて善き教育を受けしむるを可とす。又修業僅か四ヶ年にては、十分なる教育を施すこと能はざるは明かなり。土人をして、向上發展せしめんと欲せば、現在の生活を改善すると共に、其の子弟の学齡並びに修業年限を旧に復する必要あるべし。
- 二 和人士人の児童をして、相互に了解会得して同情の念を起さしむべし。小学読本巻十、第二十二課「あいぬの風俗」は、之れを省きて、更に適當なるものを加へられんことを望む。
- 三 旧土人小学校を優等にて卒業し、進んで中等学校に入らんと欲するものには、保護費又は旧土人共有財産の収益を以て、奨励的に入学せしむ可し。
- 四 旧土人小学校の経費を増して、之れが経営に遺憾なからしむべし。余り多く国家に依頼して御迷惑を掛くるは、善き事にあらざれども、アイヌの境遇にては、是れ亦止むを得ざるものなり。

この文章の前に成人アイヌへの注意を喚起する七カ条が掲げられている。その中の「
二 男子の飲酒の常習を絶対的に禁ずるか又は節せしむべし。蓋しアイヌ人口の漸減は、アルコール中毒に因ること多きのみならず暴飲は彼等を墮落せしむる第一歩なればなり。」とある。須田茂氏が探索した資料の中に、武隈徳三郎の暴飲ぶりやアルコール中毒に関する記述が多く、鉄道事故や最後

の轢死も酒が原因であったことを思うと残念である。

本の「序」はジョン・バチューラーの英文和訳つきの文章である。校訂を引き受けた河野常吉は「アイヌ物語を読みて所感と希望とを陳ぶ」の中で、「従来アイヌにして教員と為りしもの六名あり、即ち幌別の金成太郎氏、静内の高月切松氏、元室蘭の山根清太郎、同留太郎の兄弟二氏、長万部の江賀寅三氏及び十勝の武隈氏なり。而して金成、高月の二氏は品行の不良を以て前に失敗し、山根氏の兄弟は温良の聞えありしも惜むらくは中途にて病死し、今日残るは江賀、武隈の二氏のみ。余は江賀、武隈二氏が益々修養に努め、倦まずたゆまず、以て同族の為に十分尽す所あらんことを切望す。」と書いている。

『アイヌ物語』が刊行されて5年後の1923（大正12）年8月10日、郷土研究社から知里幸恵の『アイヌ神謡集』が刊行された。

結び

大正期にはほかに、久保栄、島木健作、本庄陸男、詩人の吉田一穂、伊藤整、小熊秀雄などが創作活動を開始していた。1921（大正10）年、北海道帝国大学から『歩み』、『北大文芸』などの同人誌が創刊された。これらの中心になったのはドイツ留学から帰国した早川三代治であった。農学部農業経済学科の専任講師を勤めるかたわら文藝部の顧問となって後進を育成した。

Hokkaido Literature in the Taisho Era

KAMIYA Tadataka

Abstract: Hokkaido literature is here the literature in which Hokkaido is treated more or less. I have set limits to the Taisho Era (1912-26): in this period Hokkaido as an internal colony together with Saghalien has turned into a relentless laboratory to foster national industry. In the history of Hokkaido literature Arishima Takerou is hitherto the main feature of the Taisho Era, and Motoki Shizu and Morita Tama are mentioned shortly. In this study refraining from overlapping, I have tried to assess buried novelists such as Numata Ryujin, Kobayashi Takiji, Yamabe Yasunosuke and Takekuma Tokusaburo.